

消 息

海外関連学会との交流

本年、名古屋での第九六回日本医史学会総会では、会場右前面に海外関連学会から祝賀の花が設置され、文字どおり花を添えていた。これは各国医史学会との交流の一環として、理事評議員会と総会の承認を受けて本年より実施されたもので、今後も継続・拡大することが望まれる。

その契機は以前の学会総会会場に設置された大韓医史学会からの祝賀の花籠で、お気付きだったことと思う。これは参加された大韓医史学会の奇昌徳先生により出されたものだった。昨年の夏、東京の国立教育会館で開催された第四回国際アジア伝統医学大会に中華医史学会から鄭金生中国医史文献研究所所長、大韓原典医史学会から朴贊国慶熙大学校韓医科大学原典医史学教室教授が参加発表され、歴史関係が深い日中韓三国医史学会の交流が話題となった。ただ言葉の問題もあって人的往来は容易でないことから、とりあえず学会誌の交換と、総会会場での祝賀花籠を相互に設置するのが現実的ではなかるるか、ということに落ち着いた。これが第二の契

機だった。

さっそく中国では医史学会委員会の承認があり、九四年十月十一〜十三日に重慶で開催された中華医学会医史学会第十一次医史学術会議の会場に花籠(写真1)が設置された。その記事は九五年一月の『中華医史雑誌』二五巻一号に掲載されている。韓国でも承認され、本年四月七日に開催の九五年度大韓原典医史学会定期総会会場に花籠(写真2)が設置された。



写真1 北里研究所医史学研究会「日本医史学会」が併記していたが、本年からは正式に日本医史学会の名義で設置されることになる。大韓医史学会も当方法による

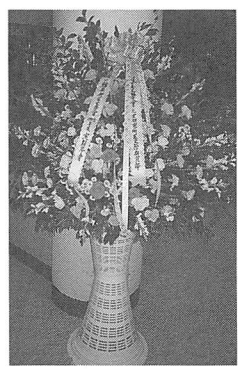


写真2 韓の四学会で相互に祝賀の花が会場に設置されることになるだろう。またここに紹介したように、会

場の写真を相互に送り確認することになっている。

今後もうこうした試みを通じ、さらに多くの海外関連学会と交流が重ねられることを期待したい。

(真柳 誠)

近藤均氏《紹介》『ヴェサリウス著…

人体構造論抄…中原訳』（本誌四〇巻第四号）に寄せて

著書に対する書評はあっても書評に対する書評というのはあまり聞いたことがない。しかし今回本誌四〇巻第四号に寄せられた近藤均氏による中原訳『人体構造論抄—ヴェサリウスの the Eptome』の《紹介》記事に関しては実に読後感の悪い悲しい気持ちになり、いたたまれずして筆をとらせて頂いた。同じ歴史に興味を持つ者としてこの様な「事件」が誌面の片隅にせよ生じたことは残念である。

正面きつてのしかも、学術的構えでもつての徹底的な非難は正直言つて驚いた。確かに言評のどの一点についても反論の余地はないだろう。氏の言われるとおり誤訳はあつてならぬ事である。これを達成するにはその分野におけるそれなりの学識と経験が要求されるであろう。つまりはその分野で学識と経験のないものは翻訳に手を出すなという事になる。これは正しい。ヴェサリウスの翻訳をなさんと欲するものは言語に堪能にしてかつ人体解剖の学識並びに臨床ないし遺体解剖の経験を踏み、なお歴史的展望を持つ者のみこそが当たる

べきであろう。実に正論である。しかし、ではそのような人物が日本にいるのか？

ヴェサリウスの翻訳に限らず古今の第一級古典はぜひ邦語訳が望まれるが、その翻訳は本来であれば上記の資格を備えた人のみがあたらねばならぬであろう。しかし、そのような条件を備えた人を持てば、適格者がいたとしても実に百年に一人の人材ではないか。正論故に反論せずとありたいところであるが、正論であるにも関わらず胸につかえるところがあるのはこの点の故であろう。

「翻訳の使命とその限界」は文化の輸入国日本においては重要な課題であつたし、今後もまた有り続けるであろう。「翻訳論」という分野があるくらいである。中でも翻訳における誤訳の問題は技術的にも哲学的にも根は深い。詰まるところ、それは翻訳の現実の中での効果効用に行き着くのである。誤訳がどの程度の弊害を生じるかという現実論を考えた場合、結局はどのような誤訳部分なのか、またその文献をどのような人がどのような目的で利用するかに懸かっているであろう。解剖学的事項を詳細に研究する人々にとっては解剖学的事項の誤訳は大きな弊害であろうし、文化史的に大局を論じたい人には目も通さぬ所かも知れぬ。そして、その目的によつては弊害の大きい人々にあつてもその専門レベルに依じてその翻訳のみを唯一の根拠にする事もないであろうから、実害は少なからう。問題は原典もしくは他国語の翻訳文献にまで遡及できない人々への弊害であろうが、これまた受取手の